

東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮

——巫歌「成造プリ」と燕院の縁起説話をめぐって——

邊 恩 田

一 報恩の内容——「米」と「家建て」——

日本の昔話「腰折れ雀」について比較の視点から論議されたなかで、日本と朝鮮半島とをつなぐ重要なものは、「燕」と「家建て」モチーフである。

一九七〇年に島根県飯石郡吉田村の土屋タマ氏から採録された「つばめの報恩」^①は、それまでの「腰折れ雀」にはなかった「家建て」のモチーフがあるという点で、画期的な資料となった。

この資料を受けて、稲田和子氏は『日本昔話事典』^②の解説で、大工の家建てのモチーフが、崔仁鶴氏紹介の韓国の昔話と類似することを指摘し、腰折れ雀は「舌切り雀」のようにわが国独自の発展はなく、朝鮮から伝来したとみられている。^③と述べられた。

稲田浩二氏は、韓国の昔話にも「家建て」モチーフがあることから、

ら、両話の類似点で注目を要するのは、「西瓜（ひょうたん）」の中から大工たちが現われて主人公のために家を建てる点であろう。^④

とされ、「この微細な点の一致は偶然の結果とするよりも、両者の見えない交渉を考える方が妥当かと思われる。この点は、……山陰地方と東アジア大陸との昔話の交渉の根の深さとして理解すべきであろう。^⑤」と指摘された。

また、「いまここで、目に見えない伝承の糸をたぐってみると、日本の「腰折れ雀」は朝鮮半島から日本海の波に乗ってしばしば渡ってきたものが、少しずつ土着していったものであろうか。^⑥」ともいわれ、伝播論を示された。

大島建彦氏は、『宇治拾遺物語』と昔話』において、長野県飯山市や島根県飯石郡、広島県世羅郡の話に雀ではなく燕があらわれるのは中国や朝鮮の例と一致し、それだけでなく、「島根県飯石郡吉

田村の例で、西瓜から大工や木挽が出てきて、大きな家を建ててくれたというのは、朝鮮の伝承と近いようである。」^⑤と、やはり家建ての類似に注目された。

これらの先行研究をふまえて筆者は、燕と雀・兄弟設定と隣の爺型・大工の家建て、そして坊主や借金取りが出てきて懲罰するモチーフと趣向に着目して、朝鮮半島からの伝播・受容と変容について考えたことがあった。^⑦

筆者は、この「家建て」のモチーフこそは、東アジアのなかでも特に朝鮮の地に発する特徴と考えているが、それを結論づけるには、中国やモンゴル、中国少数民族など東アジアの類話をチェックする作業が必要となる。本稿ではこの作業を進め、さらに「家建て」モチーフが朝鮮半島の何に本源があるのかといった問題についても、巫歌や寺院縁起を紹介しつつ検討を加えてみることにする。

また、報恩の「白米」についても考えたい。前稿では深くふれることができなかったが、昔話「腰折れ雀」^⑧には、鎌倉時代一三世紀初めの文献「宇治拾遺物語」の「雀報恩事」^⑨が、もともと古い書承説話として先行してある。すでに多く指摘があるように、ほぼ同じ筋の話といえるが、しかし両者に相違点もあることは、小峯和明氏や廣田収氏が詳細に論じられている。^⑩

いま、「家建て」のモチーフに着眼して言うならば、両話の決定

的な相違点は、『宇治拾遺物語』『雀報恩事』の方に「家建て」モチーフがないことにある。

しかし一方、両話は、「米」（白米）が出てくるという点で、まったく一致しており、これが揺るぎのない伝承であったことが知られるのだが、「米」が出てくるのは、朝鮮半島の話でも全く同じである。同じではあるが、現伝の韓国の資料では、『宇治拾遺物語』『雀報恩事』のようにどのひきこからも白米が出るのではなく、三つ（伝本によっては四つ、五つとなる）割った中味はそれぞれ異なっていて、米とお金（米櫃と錢櫃）・絹織物・家具家財・金銀宝石・家建て、といった多様性を見せていた。^⑪

おそらくこれは、文芸化などによる改変、増補の結果と考えられるものであるが、一つめから米が無尺蔵にあふれるというところは、この説話の古態をとどめるものだと思われる。

とすると、『宇治拾遺物語』『雀報恩事』のように「白米」だけを報恩にもたらす要素は古層のものであり、「家建て」モチーフはあとから受容されたものではないかという推断が成り立つ。

この点についても、東アジアにおける「米」（白米）モチーフの様相を通してさらに検討していくことにする。

二 東アジアにおける伝承

中国の『搜神記』所載話「黄雀の恩返し」は、「腰折れ雀」の類話として取りあげられた最初の海外の説話である。『搜神記』は、晋の干宝がまとめた六朝時代の説話集で、三五〇年頃の成立であるとされる。

江戸時代の博学な滝沢馬琴は、一八一二（文化八）年刊の『燕石雜志』^⑩で「舌切雀」について述べるなかで、中国にも広く視点を向けて、『搜神記』を引きあいに出していた。曰く「宇治亜相は楊宝が故事をよくしりて、雀の物がたりを作り給へるなるべし。」と。ではその「黄雀の恩返し」を武田昇氏訳で引くと、

漢のとき、弘農（河南省）に楊宝という男がいた。九歳のとき、華陰県（陝西省）にある山の北側で、一羽の黄雀がみみずくに襲われて、木の下に落ち、そこをまた螻や蟻にいじめられているのを見つけた。宝はあわれに思つて抱き帰り、小箱のなかに入れ、黄色い花を食べさせた。こうして、百日あまりたつうちに羽が生え揃い、朝飛び立って行つては、夕方になるとまた帰ってくるようになった。

ある夜ふけに、宝は本を読んでいてまだ床につかなかつたが、そこへ黄色い着物を着た少年が現われ、宝に再拝して言った。

「私は西王母さまの使者です。以前蓬萊山までお使いに行く途中、うっかり油断していただきませんでした。あなたの厚いご人徳に心から感謝いたします」そして白い玉環を四つ、宝に差し出して、「あなたのご子孫は、きつとこの環のように清廉潔白で、位は三事を極められるでしょう」と言うのだった。^⑪

である。黄雀が恩返しに持ってきたのは玉環であつて、「米」ではなかつた。また「家建て」も見えない。

すでに指摘したが、この話は鳥の恩返しの話ではあつても、つる性植物が登場しないので、「腰折れ雀」の比較対象とするには問題が残る。ただ、報恩が「白い玉環」という内容は、あとで見る中国と少数民族の類話で「金銀」が出てくるケースに近いといえる。

經典の『賢愚経』卷五散檀寧品が「雀報恩事」の本源であろうという見解もあつた。大きな「瓠」をわると、「麦」が満ちあふれるという話であり、ことに古文献として見のがせない資料であるが、鳥は登場せず、鳥の報恩話とはなっていない。

また日本の『本朝法華験記』中巻第四八「光勝沙門法蓮法師」にも、「瓠」の中に「精米」が入っていたり、瓠から「五斗白米」が生じるという話が見えている。^⑫

瓠と白米がセットで仏教説話にあらわれることから推せば、この

要素は、相当古い時代からあったと考えてよい。そしてこれが、一般の説話や昔話のなかに、仏教的要素が後退するかたちで残るといふ伝承の道筋と、また鳥の報恩話とつながるといふ展開も、想定できそうである。

次に、エバーハルトが一九三七年に出した『中国昔話の型』にこの類話があり、関敬吾氏が『日本昔話大成4』で紹介されている^⑭。しかし「金持ちになる」という表現で結果が表されるだけで、報恩の具体的内容物まで詳しく紹介されていないので、よくわからない。

その後、中国の丁乃通氏は、一九八六年に新資料によつた『中国民間故事類型索引』^⑮を出し、中国の類話について、「善と悪の兄弟（婦人）」と恩返しする鳥」と題し詳細なタイプ化を示された。そこに挙げられた報恩の内容が何であるのかを西脇隆夫氏の訳で見ると、

感謝した鳥（あるいは神）は、彼に不思議な種を与え、植え方を教える。大きなスイカ（ふくべ、カボチャ）が生える。それを切ったり煮たりすると、中に金や銀がたまっている。

という。「金や銀」がたまっているとするだけで、実の中から「米」が出ることはないようである。また「家建て」モチーフも見あたらない。

中国広東省潮州で採集された「小鳥の恩返し」を、直江広治氏が翻訳紹介されているが、そのあらすじは、

東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮

情深い少年が傷ついた燕を助ける。燕が報恩に、黄色い瓜の種子をくわえてくる。黄瓜の中から黄金、白銀が出てきて富み栄える。隣に住む欲深い少年が、まねて故意に燕を傷つけ、結局ひどい目にあう^⑯。

という。ここにもやはり「黄金」や「白銀」が出てきたとすることで「米」は出てこない。「家建て」もない。

では次に、モンゴル民族が伝える類話についてみる。一九二二年崔南善氏は、「外国から帰化した朝鮮古談―蒙古のフンプノルブ」において、モンゴル民族の類話だとして紹介し、「フンプノルブ」の話と対比し関係性を述べている。ところが話者や採録地、出典などがまったく示されていないので、比較研究の資料として扱うには残念ながら問題が残る。

一九二七年、モンゴルにおける類話を紹介したのは鳥居きみ子氏であった。「腰折れ燕」^⑰と、一九三六年の「脚折れ燕」^⑱がそれである。著名な文化人類学者である鳥居龍蔵と東北中国方面へフィールド研究に赴いた際、彼女が「一九〇六年（明治三九）年、南蒙古の喀喇沁右旗の女学校」^⑲で日本語教師をしていた折り、「七月十日、今日女生徒より聞き得たる、「腰折燕」の話」^⑳だとしながら紹介したものである。

昔々或處に一人の心優しき娘があつて、窓の下で衣を縫つて居

た。其他へ一羽の脚の折れた燕が、軒端の巢から落ちて来た。之を見た娘は可哀相に思つて早速有合せた五色の糸で脚を巻いてやつたところ、燕は大變うれし相にして大空高く飛び去つて行つた。やがて何處からか瓢の種を只一つ啣へて来て、娘の居る窓際に置いて去つた。娘は其種を拾つて試みに庭に蒔いたところが、日ならず瓢の芽が出て段々と蔓も延びひろがり、遂に一つの瓢がみのり日を追ふて大きくなつた。娘は打ち喜んで、よき頃を見計つて、瓢を切り取り其口を開けて見たら、中には米が満ち溢れて居た。こは先の燕の恩報じの賜ならんと、娘の喜び一方ならず、之を炊ぎ食ふに、来る日も来る日も瓢の中の米は盡くる事なく、貧しかつた娘の家はいつしか富み榮えた。偕又憐に住む心卑しき娘が、之を聞き知つて羨むこと限りなく、己が家の軒端に巢くう燕を取り出して態と其脚を折り、五色の糸で巻いて放してやつた。燕は恨めし相に飛び去つたかと思ふと、間もなく一つの瓢の種を啣へて来て、娘の居る窓際に置いていつた。娘は非常によるこんで、隣の娘より多くの福を得たく折りつ、庭に蒔き成長を待ち侘びた。やがて芽が出て蔓が延び廣がり一つの瓢が實つたので、娘は出来る限り大きくなつた頃やつと切り取つた。そして自分の方の瓢は隣の娘のよりも多くの米が出るであらうと、喜びに満たされつ、口を開い

た途端、瓢の中から太い蛇が一匹這ひ出して来た。驚きのあまり心卑しき娘は其儘息が絶えて死んでしまつた。

右訳文に、瓢の中にはいつていたのは「米」だと訳出されているが、しかしこれは白米のことではないので、注意を要する。この訳「米」については、「蒙古で米と云ふのは、モンゴル語蒙古米の事で、モンゴル語麻黍の字を書いて居る。」という鳥居氏の説明があり、モンゴルアムというのは「黍」であるという。

当時彼の地で稲作は行われていないのであるから、米がないのは当然であつて、モンゴル民族が主食としている「黍」が恩返しに出てくるのは、おそらく、米（白米）が出る話が伝わつたが、「米」を、自民族にふさわしい「黍」に変容させた結果ではなかつたかと推測されるのである。

以上のようにモンゴルの類話にも「白米」と「家建て」は見られない。

ところで、右のモンゴルでの採録話を受けて、孫晋泰氏は、「腰の折れた燕の足を結んであげたというのは理解できないが、この説話が興夫説話であるのは確かである」と述べている。そしてモンゴルと朝鮮の類話の相互関係性についても、

モンゴルのものが朝鮮へ輸入されたというよりは、元代に相当数蒙古に帰化した高麗女性たちを通じて、蒙古に伝播したもの

ではなからうか。²⁶⁾

と述べ、高麗からモンゴルへという説話の伝播ルートを想定していることは注目される。²⁷⁾

ここにいう朝鮮半島へのモンゴルの侵攻とは、高麗時代の一二三一年頃から始まり、一二三四年にモンゴルは金を滅ぼし一二七一年に国号を「元」に改めた後も、高麗への支配が続いたことをさす。

一三五六年になって元の支配は完全に放逐されたのであるから、つまりは、高麗女性が国境を越えモンゴル（地理的には中国の土地もはいる）に居住するようになったのは、一三世紀半ばから一四世紀半ばにかけてということになるだろう。

さて、「腰折れ雀」の資料を中国の少数民族にまで広め、その特質と伝播について広い視野から論じられたのは西脇隆夫氏であった。「シルクロードの『腰折れ燕』²⁸⁾」において西脇氏は、「『腰折れ燕』の話は、朝鮮から東北中国、さらに西北中国にかけて広く分布している。」²⁹⁾と指摘し、カザック、ウイグル、シボ、満州、モンゴル、ダウル、朝鮮の、それぞれの民族の類話を紹介された。

それによって、実の中から出てきたものを確認すると、

カザック族——金塊

ウイグル族——金銀

シボ族 —— 金

満州族 —— 金

ダウル族——金銀

朝鮮族 —— 穀物（米）

とされている。³⁰⁾ 朝鮮族だけを除いて、すべて「米」ではなく金銀・金塊であることがわかる。（モンゴル族は右掲出の鳥居氏採録のものなので省く）

また西南中国の類話についても、

トゥチャ族——金銀

マオナン族——銀

ナシ族 —— 金銀

ムーラオ族——農具など

ヤオ族 —— 金

チワン族 —— 仙女

であって、やはり金、金銀が圧倒的である。³¹⁾

このように右にあげた中国の少数民族の類話では、恩返しに「米」が出てくることは全くといってよいほどなく、金や銀であることは、すでに取りあげた『搜神記』など中国の類話に共通する要素であることが知られる。

東北中国に居住する朝鮮族における類話については、西脇氏が取りあげられたが、その後、資料の全訳が出されて、その全貌を知る

ことができるようになった。この朝鮮族の昔話を翻訳紹介されたのは、依田千百子氏と中西正樹氏である。『金徳順昔話集—中国朝鮮族民間故事集』^①は、中国朝鮮族の昔話を伝えるきわめて貴重な資料である。これはまことに特異な伝承のケースであって、次にこれを見てみたい。

金徳順氏が語った「ホンブとノルブ」は、長文のため引用は差し控えるが、善良な弟が割ったバク（ひきこ）の数は、一つではなく五つである。そして実から出てきたのは、

一つめ——金銀

二つめ——米

三つめ——絹織物

四つめ——家建て

五つめ——美人（仙女）

であり、「米」と「家建て」が認められることをまず指摘しておく。実を割る数の多さも、出てくる内容においても、現伝の韓国の資料とはほぼ同じである。

しかしながら、一つめから「金銀」が出るとする部分は、金徳順氏が一九〇〇年慶尚北道の地で生まれ、結婚後一九三〇年に、中国東北部吉林省へと移住していったという歴史的経緯をもつ方であることに、背景があるようである。というのは、現伝韓国の当該話の

資料では、すべて一つめから「米」と「お金（ぜに銭）」が出てくる（一部読み本を除く）設定であるからだ。金徳順本で一つめから「金銀」が出るのは、これまで見てきたような中国や中国少数民族における設定と同じものである。

つまり金徳順氏は、移住先の中国の地での伝承の重要な要素である「金銀」を受け入れ、これを優先的に自分のなしのなかに挿入し、「米」を二つめに後退させて語ったということになるわけである。この変化は見逃こせない特徴であり、人の移住と伝播と変容という問題に、大きな示唆を投げかけてくれるものといえよう。

以上、これまでに取りあげた資料を検討した結果、次のようなことが指摘できる。

- ①中国、中国少数民族、モンゴルの類話においては、管見の限りで「米」が出てくるケースはなかった。金や金銀、金塊が出てくるのが圧倒的であった。（モンゴル族の黍についてはすでにふれた）
- ②中国、中国少数民族、モンゴルの類話において、「家建て」のモチーフもまったく見られなかった。この結果、「家建て」モチーフは朝鮮半島における独特なものと判断された。そしてこのモチーフは、朝鮮から日本の地へ伝播し、島根県吉田村の「つばめの報恩」にその姿をとどめることとなった。



図1. 燕尾寺



図2. 燕院の石仏と松

三 巫歌「成造プリ」

——〃燕〃と〃家建て〃をつなぐもの——

朝鮮半島の類話では、なぜ「燕」が報恩にもたらしたひさごの実から大工達が出て家を建てるのであろうか。

この疑問を解く鍵は、韓国慶尚北道の安東に伝わる燕院・燕尾寺の縁起説話にあると筆者は考える。

その前にまず、建築儀礼で必ず誦じられる巫歌「成造プリ」に、燕院が登場しているので、その点を確認しておく必要がある。

慶尚北道の安東地方に伝わる巫歌「成造プリ」は、全国の一般のものと同様、家屋敷の新築・改築・移転などの重要な儀礼で誦じられる。家の神であり人間に家建築の方法を教えた神と信仰されており、成造プリは成造神の本縁来歴を説き語る巫歌となつてゐる。

ところで、成造プリには大きく二種の本文系統がある。成造神の本縁を天上界とし、成造神として座定されるまでの一代記を叙事的物語として描くものと、いま一つは、重要な建材である松の樹の本縁を、慶尚道安東の燕院だと説き、その松種から生長した松の樹で家を建てる工程を語りその富貴をはめる内容のものである。

たとえば、京畿道地域の成造巫歌「黄帝プリ」の場合、成造大都監の本を解けば、何處が本なりや。慶尚道安東中村の

燕院こそ本なれ。燕院に入り往きて、松種五斗を採り、と語りはじめ、成造神の本縁が慶尚道安東の「燕院」であるとかす。そしてこの松の種をまくと、

…十年近く育てば、落々長松となり、三、四十年、百年近く育てば、小棟の木、大棟の木となる。

と、立派な建材に育つことを語る。そして続く本文では、立派に育つた松の樹を、山入りして伐り出し、建材にして家を建てていく工程を、宅地の地ならし・礎石すえ・柱立て・棟上げ・瓦ふきに至るまで詳細に描いていく。

慶尚道安東以外の他地方の巫歌であっても、必ず安東の燕院が成造神の本縁だと説いてるのであり、このことの意味は大きい。それは、燕院の松の種から育つた松で家を建てると語ってこそ、立派な家になり家の繁栄が保証されるという信仰がその背景にあつたからであろう。

巫歌の本文に説くように、実際に、現在の燕尾寺(図1)のそばには巨大な磨崖仏があり、その石仏の右肩には、図2のように大きな松の樹がはえている。この松については「チエビウオンの弥勒仏と李如松」(『安東の伝説』注④)のように、この松が「国の松」とあがめられて全国に広まったとかたる伝説もあり、燕院の松の聖性を説くものとしても興味深い。

そして重要なのは、この磨崖仏にかかわる伝説と燕院縁起には、燕と瓦工と家建てをつなく伝承が見いだせるのである。

四 燕院の縁起説話

——「燕」と「大工」と「家建て」をつなくもの——

慶尚北道安東市泥川洞には、現在「燕尾寺」という寺と、巨大な岩石に彫られた磨崖仏の弥勒仏像があり、古くより信仰を集めている。燕尾寺は通称燕院と呼ばれていて、「チェビ」は燕の意味、「ウォン」は院であり、この一帯の村を「チェビウォン村」と呼んでいる。

現在この寺は「燕尾寺」と表記されているが、古くは「燕飛院」という名であったことが文献に確認できる。

朝鮮王朝時代初め、一四八一年（成宗十二年）に完成印行された官撰の地理書『東国輿地勝覧』（五十巻）、および増補版として編纂され一五三〇年（中宗二十五年）印行の『新增東国輿地勝覧』（十五巻）に、このことが明らかである。巻二十四「安東大都護府」の「駅院」条には、両書ともに次の記事が見えている。

燕飛院在府北十二里³⁰

すなわち、「燕飛院」は、安東大都護府（現在の安東市）から北へ十二里のところにある院だという説明がなされている。院の名が、

「尾」ではなく「飛」の字を用いた「燕飛院」であることが確かめられる。

したがって、少なくとも増補版『東国輿地勝覧』印行の一四八一年までは、そして増補版の出た一五三〇年頃にも、「燕飛院」という寺院名であったことが明らかとなる。

このことは、同じ朝鮮時代に編纂印行された地方史誌の『永嘉誌』においても、確認できることである。

『永嘉誌』（八巻）は一六〇八年に成立した安東邑誌であるが、その「佛宇」条には、「燕飛院佛寺」とあって、寺院の名を「燕飛院」と記していることがまず確認される。そして本文にはさらに詳しい解説が続いているが、この部分はきわめて重要な内容と判断された。その原文は次のようである。

燕飛院佛寺 在府西北十二里五圖山南因立石作佛像高十餘丈唐貞觀八年作六間閣以覆之飛覺縹緲翼然若半空厥後再次重創棟樑之材皆因舊焉³¹

ここに見るように、燕飛院は、府の西北方向十二里の五圖山の南にあること、立石に高さ十余丈の仏像を作ったこと、唐の貞觀八年に、六間の大きな閣を作って仏像を覆ったことを記録している。

そしてさらに、その閣の飛ぶがごとき覺は縹緲としていて、あたかも翼が半空にあるかのようだと、その様子をも記している。大きな

磨崖仏を覆うように建造された仏閣のすがたが、鳥が大空に翼を広げているようだといふのである。

鳥が飛ぶようだといふ表現のところは、この記事の背景に、鳥が寺院の名の由来になった伝承があったらしいことを示唆するように見えるが、このことが次の資料に確かめられる。

なぜ「燕飛院」と名付けられたのか、その由来については、現在の燕尾寺発行の『仏教修行讀誦集』所載の「安東の燕院チェピウオン 燕尾寺の由来」が注目される。

そこには、寺院建立にまつわる次のような由来が記されている。これを訳出し紹介しよう。(ABCを便宜上私に付した)

安東の燕尾寺は、六三四年(新羅善徳女王三年)高句麗の普徳法師の弟子である明徳が創建した。石仏像をおおっている殿閣が、燕に似ているので燕子楼と呼び、法堂と寺がそれぞれ燕の嘴と尾の方向に位置しているので、燕口寺と燕尾舎と名付けた。現在の燕尾寺は、朝鮮時代の崇儒抑仏策によって燕口寺がなくなることで、その名前までも忘れ去られたが、一九一八年に寺を再建させた折、舎が寺に変わって付けられた名前である。

[A]

チェピウオンは、もともと高麗時代に出張官吏達の宿食の便宜をはかるため設置した院の一つであって、燕子楼の前方約二

百mの地点にあった。燕が飛んでいく方角にある院ということ
で燕飛院と表記したが、ふつう言う時にはそのまま「チェピウ
オン」と呼んだ。

[B]

燕尾寺には、お寺と仏像の由来にかかわる数多くの伝説が伝わっている。代表的な伝説をひとつ紹介すれば、次のようである。

新羅時代、院で手伝いをする燕コという名の美しい娘がいた。気だてがよく仏への信仰心もあつく、立ち寄る旅人たちに、真心をつくして親切に世話をやいていた。隣り村にくらす金青年は、金持ちではあつたけれど善行を積むこともせず暮らしていたところ、突然の死によつてあの世へ行ったのだが、金青年は燕という娘があの世に積み集めていた善行を借りて、あの世の人々に布施を行うことで、ようやくこの世に戻ることにできた。金青年はあの世に行つてきたことを話して燕に財物を分け与え、娘はその財物でもつて、雨風にあたるがままであつたチェピウオンの石仏のために、大きい法堂を建てることにした。法堂が完成したその日、最後の瓦をのせていた瓦工が、足場を失い屋根から落ちてしまったが、瓦工の体は瓦のようにこわれ、魂は燕となつて空へと飛んでのぼつていった。これによつて、燕飛寺または燕尾寺といふようになった。燕コは、三八

歳になった年に娘のまま死んでしまった。燕コウが死ぬや、天地を揺るがす音があり、巨大な磐がまっつたつに割れて、今の石仏が生まれた。弥勒仏は、善良な燕の死んだ魂が変わって生まれたいものである。

「A」は寺の名前の変遷を新羅時代に遡って説き、「B」はもと高麗時代の院であったことを説き、燕飛院とも表記するが一般通称のチエビウォン（燕院）と呼んでいることを説く。内容上若干時代的齟齬があるものいませこれにはふれず、「C」に注目したい。

チエビウォンの磨崖仏のために法堂を建てていた瓦工が、完成の最後に足を踏みはずし死んだが、その魂は燕になって天空に飛んでいったとする付線のところは、まことに重要である。「瓦工」が死んで「燕」になった、そしてその瓦工が行っていたのは法堂建築という「家建て」であった、ということである。

ここに、「燕」と「瓦工」と「家建て」の三つの要素が、一つの伝承のなかでつながっているのが確認された。

ここでは「瓦工」とあるが、瓦工は、家屋建築の最後の工程である瓦葺きを担当する職人であれば、これを「大工」ということばに置き換えてもさしさわりはないであろう。実際、先掲した金泰坤氏の報告^⑧では、瓦工ではなく「大工」となっている。

それによれば、四〇数年来この寺を守ってきた総務だといわれる

金珠任氏から、一九六五年五月二〇日（採録当時七二歳）に聞き取ったという話であり、娘が死んで石の弥勒仏となって湧き出たと語る内容であり、これは右の「C」にほぼ同じである。しかしこのあとに続く寺の創建にかかわるところには相違がみられ、その部分を次に訳出する。

その後、国の方では、弥勒になるまで娘は処女のまま生きて死んだので、怨みがあるに違いないとして、解冤と慰労の意味で、弥勒仏のそばに寺を一つ建てるよう指示をした。そうして、立派な大工ふたりのうち、一人は「イムチョン閣」九十九間を建てることになり、もう一人が「燕尾寺」を建てることになった。けれどもこの場所は風が強く吹いて、柱を立ててもすぐ倒れてしまい、数十回もくりかえした末やつと柱を立てた時には、「イムチョン閣」を建てに行つた大工は、九十九間を建て丹青までも終えて戻ってきた。この時、この大工は単間を建て丹青をやるうとしたけれど、同じ大大工なのに、向こうは九十九間を建て丹青までもやり終えてきたのに、自分の方はやつと単間を建てただけだという羞恥心のため、染料桶を手にしたまま岩の上から落ちて死んでしまふや、燕になって空へと飛んでいった。それで国ではこの寺の名前を、つばめの「燕」の字、尻尾の「尾」の字でもつて「燕尾寺」と名付けてくれたが、その後、

「尾」字に「鳥」字がついて「燕尾寺」になったという。^④

ここでもやはり、大工が死んで燕になったとある。

このように「燕」と「大工」と「家建て」の強い結びつきが、燕尾寺縁起に見いだすことができたわけである。

おそらく、磨崖仏の法堂（あるいは閣）の建築をになった瓦工や大工といった人物が、非業の死を遂げるということがあり、その魂を鎮める何らかの宗教的儀礼が行われたのではないかと、伝承の背景を推測することができよう。それは巫俗儀礼かと思われ、女性が深くかかわるものであったと考えられるのは、燕という名の娘が登場するからである。燕という名前は、おそらく彼女の個人名ではなくて、燕となった死んだ大工（瓦工）をまつる女性（おそらくはムードンなどの巫女）に仮託された名前だったのであるまいか。こうした巫女的女性が、この伝承を支えたであろうと推測できるのは、代々この寺の住職を女性の僧侶が務めているという事実があるからである。先の金珠任氏もそのことを傍証してくれよう。

したがって、建築儀礼において誦じられる巫歌「成造ブリ」になぜ燕院チェビョウインが登場し家建てが描かれるのか、そしてまた燕の恩返しの話（「フンプとノルプ」「フンプ伝」「フンプ歌」）のなかでなぜ「家建て」が描かれるのか、その理由が、ここに至って納得されてくるのである。

以上で見えてきたように、「燕」「大工（瓦工）」「家建て」の三つの要素は、きわめて強いかわりをもつて巫歌「成造ブリ」と燕院（燕尾寺・燕飛院）縁起伝承にあったがために、「燕」が主人公として登場し恩返しをするこの話のなかに、大工が出てきて家建てをするモチーフとして受容されるようになったわけである。

五 伝承のみちすじ

ではその時期は、はたしていつであろうか。その時期を特定するのは、口承世界のことであり、現伝の資料だけでは難しいが、ただ、朝鮮半島で巨大な磨崖仏像が多く造られたのが高麗時代（九一八―一三九一年）であることから推せば、それ以降であろうといえるが、昔話（説話）のなかに「家建て」のモチーフとして受容されるには、かなりの年月を要すると推測されるので、朝鮮時代に入ってからではないかと思われる。

したがって、日本の『宇治拾遺物語』『雀報恩事』成立の一三世紀初めまでの時期に、「家建て」モチーフを有する話が日本に伝わることはなく、「米」が報恩に出てくる話であったであろうと、判断されるのである。

一方、先述したように、高麗時代に元の侵略支配を受け多くの高麗女性が大陸へ移住したために、元代の中国やモンゴル民族の説話

に伝播したとするならば、それは二三、四世紀のことになり、やはり、「家建て」モチーフの無い、米が出てくる古態の話であったと推測できるのである。

注

- ① 立石憲利・山根美佐恵『出雲の昔話』日本放送出版協会、一九七六。
- ② 福田晃他編『日本昔話事典』弘文堂、一九七七。なお、韓国の「フンブ伝」はそれまで『宇治拾遺物語』所載の「雀報恩事」と比較されてきたのだが、ここで初めて昔話の「腰折れ雀」との比較がなされたのであった。
- ③ 崔仁鶴編訳『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、一九七四。
- ④ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』一八巻の「解説」、一九七八、八七八～八七九頁。
- ⑤ 稲田浩二『伝承の旅』京都新聞社、一九八二、一九五頁。
- ⑥ 大島建彦『日本昔話研究集成5 昔話と文学』名著出版、昭五九、三〇九～三一頁。
- ⑦ 邊恩田「昔話「腰折れ雀」とパンソリ「興甫歌」(「大工の家建て」をめぐって)』『説話・伝承学』七号、一九九九。
- ⑧ 小峯和明「宇治拾遺物語と昔話」『説話と思想・社会』説話伝承学会、一九八七。廣田収『宇治拾遺物語 表現の研究』笠間書院、二〇〇三の「第二章第三節「雀報恩事」考」を参照。
- ⑨ 注⑦、および邊恩田「韓国の語り物パンソリ「興甫歌」語り手・流派・語りの継承」『同志社国文学』第五八号、二〇〇三、三月参照。
- ⑩ 『日本随筆大成』第二期一九 燕石雑誌 吉川弘文館、一九七五。
- ⑪ 武田晃訳『搜神記』平凡社・東洋文庫、一九六四、三七七～三七八頁。

東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮

- ⑫ 池辺義象『校註国文叢書第十一巻 宇治拾遺物語』博文館、大正三、七十四頁の頭注。
- ⑬ 廣田収『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三、二六四頁。
- ⑭ 関敬吾『日本昔話大成4』角川書店、一九七八、二五四頁。Wolfram Eberhard, Nr. 23, 24として紹介される。
- ⑮ 近年、この中国語訳版『中国民間故事類型二』(王燕生・周祖生訳、商務印書館、一九九九)が出ている。筆者未見であるが、今後この資料が活用されるべきであろう。
- ⑯ 鄭建成他訳『中国民間故事類型索引』中国民間文芸出版社、一九八六。
- ⑰ 西脇隆夫「シルクロードの「腰折れ雀」」『比較民俗学会』一三巻一号、一九九二年二月、三一頁。
- ⑱ 『中国の民俗学』岩崎美術社、一九六七、五三頁。
- ⑲ 崔南善「蒙古のフンブノルブ」『東明』第二二号、一九三二、一一頁(原文ハンゲル)。この紹介語では、主人公は「娘」(処女)であり、「羽が折れ」た「燕」を抱すると「バク」の種をもってくる、なった実から「金銀珠玉とそのほかいろいろな宝貨」が出てくる、隣のいじわるな娘がまねると実から「毒蛇ができて」娘は死んだ、という内容になっている。鳥居氏の採録話と大きく近似するが、「米」は出てこない点に注意を引く。
- ⑳ 鳥居きみ子『土俗學上より觀たる蒙古』大鏡閣、一九二七、一〇九五頁。のち一九三六年四月号『旅と伝説』一〇〇号に「蒙古の童話に就いて」と題して再紹介しているが、先の翻訳とは若干相違がある。前者では「腰の折れた燕」、後者では「脚の折れた燕」とあって、「腰」が「脚」に改まっている。周知の如く本話の場合、「腰」(日本に多いケース)か「脚」(朝鮮のケース)かの差は大きいので、この点が不明瞭で

ある。翻訳が「脚」に訂正されたものとするならば、鳥居氏採録のモンゴルの話は、朝鮮半島の話にさらに近似することになる。

- ②① 鳥居さみ子「蒙古の童話に就いて」『旅と伝説』一〇〇号、四月号、一九三六。

- ②② 国立民族博物館「民族学の先覚者鳥居龍蔵の見たアジア」一九九三、四〇頁。

- ②③ 注②①の九二五頁。

- ②④ 注②①の六七頁。

- ②⑤ 注②①の六八頁。

- ②⑥ 孫晋泰「朝鮮民族説話の研究」乙酉文化社、一九四七、「第三篇北方民族影響の民族説話」一三八頁。なおこれは、もと雑誌『新民』二七、三八号（一九二七年七月）一九二九年四月）に不定期連載されたものである。

- ②⑦ 日本サイドの戦前の伝播論に次のようなものがあつた。「宇治拾遺に出て居る「瓢の米」の話が、朝鮮を通つて入つて来たといふことは、今ではもう確かだと言つてよからう」（柳田国男『桃太郎の誕生』三省堂、一九四二、二〇七頁、「恐らく大陸の腰折れ雀が日本の内地へ輸入されて腰折雀になったものであらう。」（鳥津久基『日本国民童話十二講』「第七講舌切雀」日本書院、一九四四、一三五頁）「腰折雀の説話は：（中略）：平安時代末、鎌倉時代初までに、海を渡つて傳來した大東亜説話の一つなのである」（一三六頁）。

- ②⑧ 注①⑦の論文。なおこの論文があることを関西外国語大学三原幸久教授よりご教示いただいた。

- ②⑨ 注①⑦の三〇頁。なお西脇氏があげた朝鮮族の資料は注③①所載話である。

- ③① 注①⑦の三三頁。

- ③② 依田千百子・中西正樹訳『金徳順昔話集―中国朝鮮族民間故事集』三

弥井書店、一九九四。本書によれば、話者金徳順氏は一〇〇話以上を語る中国の「民間故事家」であり、一五〇話かたつたうち七三話が、一九八二年裴永鎮氏によつて中国語訳『金徳順故事集』として刊行され、本書はその日本語訳である。

- また金徳順氏をたずねた貴重な報告、加藤千代氏の「中国の語り手―金徳順おばあさんを訪ねて」（『民話の手帖』三二号、一九八七）がある。

- ③③ 金泰坤「成造神の本郷考」『史学研究』第二二号、一九六九。また「フンブ伝」を成造巫歌との関連性から論究したものに、ジョン・ジュングオン（フンブ伝）と成造信仰・成造歌との関連性とその意味（『口碑文学研究』第一輯、韓国口碑文学会、一九九四）があり、燕尾寺伝承についてもふれている。

- ③④ 注③②。および邊恩田「家讀め」の構造―日本と韓国の巫歌の比較から―（『京都精華大学紀要』第五号、一九九三）。

- ③⑤ 赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上巻、大阪屋号書店、一九三七。

- ③⑥ 安東市泥川洞にあるこの石仏は、花崗岩に彫られた磨崖仏であり、高さ12・38mになる。宝物第一一五号に指定されている。

- ③⑦ 韓国古典影印大宝『新增東國輿地勝覽』明文堂、一九五九。

- ③⑧ 『永嘉誌』二六六頁。

- ③⑨ ヒョウ・ソン編著『仏教修行讀誦集』燕尾寺、一九九二、一九五―一九八頁。一九九四年十月三〇日、筆者訪問調査時に戴いた。

- ④① 注③②の論文。

- ④② 注③②の四三〇―四三一頁。「大土工」とは、棟梁格の大工のこと。

- ④③ このほかにも類話が口碑資料に伝わる。「チエビウォンと法龍寺」慶尚北道安東教育庁『安東の説話』一九九二、六三頁、「チエビウォン」（柳善喜編著『嶺南の伝説』螢雪出版社、一九七一年、二〇三頁）がある。韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系7-9』にも報告例が載

るが、この採録話では、娘の怨みを解くために寺を建てることになったとあり、大工と娘が入れ替わっている。この意味はさらに論究の必要があるであろう。

④² 注④の四三二頁の脚注3を参照。

④³ 『文化財大観―宝物中』（文化財管理局、一九六九）、黄寿永編著『国宝2』（藝耕産業社、一九八六）参照。韓国精神文化研究院編『韓國民族文化大百科事典』（一四卷、一九九一、四四七頁）「安東泥川洞石佛像」の解説でも、高麗時代「十一世紀頃」の制作だろうとする。